

このホラー映画は
なぜおもしろいのか？

ぎゃふん工房
●編



ぎゃふん工房

このホラー映画は
なぜおもしろいのか？

サンプル

ぎゃふん工房 編

ぎゃふん工房

オープニング

ホラー映画を観終わったあと、「あくおもしろかった」ですませず、「なんでおもしろいんだろう?」と考えをめぐらせてみる。そうすることで、さらに映画が楽しくなる――。

そんな観点で、20年ぐらい前から映画のレビューを書いていきます。

あるとき「そうだ。いままで書いたものを本にまとめてみよう」と思ったち、しようどう衝動的に電子書籍のカタチにしてみました。

そんな本書は4部構成になっています。

「シークエンス1●なぜおもしろいのか?」では、ホラー映画の傑作を紹介しながら、その魅力を分析します。

「シークエンス2●見かたを変えればもっとおもしろい」では、けっしてつまらなくはないけど、不満がないわけではない。こうすればもっとおもしろくなったのでは? という提案をします。

「シークエンス3●このホラー映画を1分で語る」は、小難しいことはゴチャゴチャ考えず、各作品の見どころをサクッと紹介します。

「シークエンス4●映画のレビューを書こう」では、映画をより楽しむ観点から、レビューの書きかたを指南させていただきまます。

それぞれへネタバレはしていません。作品を観る前、あるいは観たあとに楽しんでいただければ幸いです。

もくじ

オープニング

シークエンス1●なぜおもしろいのか？

『呪怨2 劇場版』は監督のフラストレーションが爆発

『女優霊』は劇中映画に不気味さが漂う

『リング』は日常がちょっとズレている

『ノロイ』で怖いのは〈幽霊〉ではなく〈人間〉

『オカルト』は安っぽいから怖い

『カルト』は〈フェイク・ドキュメンタリー〉のいいところ

『CURE』は暴力・殺人を犯してもよいと思っている人がいる怖さ

『回路』は幽霊の“侵略”を描いている

『感染』は現実世界と地続きである感覚が怖い

『予言』は「幽霊怖い」でないのが画期的

『輪廻』は恐怖を積みあげていく

『キャビン』の制作者は「こういうのが観たかったんだろ？」と言っている

『デッドコースター』は正しい人間の殺しかたを描く

『ファイナル・デッドブリッジ』はドラえもんやジョジョとおなじ

『武器人間』はみんな狂っているから怖い

『REC／レック2』はゲーマーの琴線にふれる

『悪の教典』には原作小説にない〈なにか〉がある

『オーディション』の丁寧な恋愛描写は悪夢のための儀式

『富江』は十分に冷やされた菅野美穂の演技が秀逸

『告白』はホラーとコメディー両方の感覚を味わえる

『ランド・オブ・ザ・デッド』でゾンビより人間のほうが脅威とわかる

シークエンス2●見かたを変えればもっとおもしろい

『クローバーフィールド／HAKAISHA』は展開をあえて先読みする

『ドーン・オブ・ザ・デッド（2004）』は原作を意識せずのめりこむ

『呪怨劇場版』は〈呪怨〉入門編と割りきる

『THE JUON／呪怨』はふつうのホラー映画として楽しむ

『呪怨パンデミック』はハリウッド映画のたたずまいを観る

『クロユリ団地』は前田敦子の名刺だと思って楽しむ

『自殺サークル』は無関係という〈関係〉に注目する

『叫』で幽霊がいるとしたらどんな感じかわかる

『エコエコアザラク ―黒井ミサファースト・エピソード―』でまえのんをホラー女優リストに加える

『死霊のはらわた（2013）』の死霊たちが白目じゃない理由を探る

『遊星からの物体Xファーストコンタクト』は綺麗な〈物体X〉を見る

『プロメテウス』はSFサスペンスの一作として鑑賞する

『THE 4TH KIND フォース・カインド』はふつうの人を演じるジョヴオヴィッチに注目する

『催眠』はホラー女優・菅野美穂の二重性を味わう

『コワイ女』の「綱ーはがねー」だけ堪能する

『ワールド・ウォーズ』は襲いかかる大量のゾンビに驚く

『サイレントヒル…リベレーション』は主人公・ヘザーの実在感を楽しむ

『バイオハザードダムネーション』は気持ちのいいアクションを堪能する

『貞子3D』を楽しむ3つの視点を持つ

『パラノーマル・アクティビティ』は〈フェイク・ドキュメンタリー〉の初心者に

『バイオハザードVリトリビューション』は格闘シーンに注目し主人公に感情移入する

『フォーガットン』の〈どんでん返し〉にこだわらない

『サイレン』はゲームを知っている人に

シークエンス3●このホラー映画を1分で語る

『エコエコアザラク・WIZARD OF DARKNESS』は女性監督らしい大胆さと繊細さが魅力

『PERFECT BLUE パーフェクトブルー』でわかる「アイドルに憧れる」ということ

『ソウ』のゲームに勝てるか？

『ソウ2』はもともとべつの映画だった

『ソウ3』は残虐にしてみたってこと

『ソウ4』は穴の空いたボートで海をわたるようなもの

『宇宙戦争』はスピルバーグの本領が凶悪な方向に発揮された

『ステイ』は鑑賞終了30分後に感動する

『フェノミナ』で生まれる美しいものを汚したい衝動

『トラウマ／鮮血の叫び』は美しい少女を助けたい気持ちが伝播する

『オペラ座の怪人（1998）』の美女と怪人の恋愛は美しくも哀しい

『リング0 バースデイ』で遅れてきた先駆者の苦悩と実力がわかる

『リング2』で〈貞子〉はもはや昔なじみとなってしまった

『リミット』は観てるこっちが息苦しい

『ブラインドネス』はほかの作品が避けてきた描写がある

『バイオハザードIII』はありふれたモチーフをうまく料理できなかつた

『変態村』はもてない男の悲哀を描いている？

『LOFT ロフト』は〈ミイラ〉と〈幽霊〉がいっしょに出てくる

『新生トイレの花子さん』は〈チャイドル〉が出演するのに一級ホラー

『死国』は亡霊よりも女の情念が恐ろしい

『グロヅカ』は安直に見えてじつは真摯

『渋谷怪談』『渋谷怪談2』は〈呪怨〉の物真似だからダメ

『ドッグヴィル』の独特の表現形式は〈人間の本質〉を炙り出す

シークエンス4●映画のレビューを書こう

レビューを書く前の心構え

書く前に他人のを見ない

まずは受け入れる

反論してはいけない

自分を知る

エンディング

ぎゃふん工房の既刊本

シーケンサー●なぜおもしろいのか？

ここでは、本書がおすすすめするホラー映画を厳選し、それらの魅力を語っていきます。掲載は基本的におもしろい順。「なにを観ようかな」と迷ったときのガイドとしてお役立てください。

『呪怨2 劇場版』は監督のフラストレーションが爆発

前作の不満から恐怖演出が炸裂さくれつ

本作は「史上最恐のホラー」です。大げさでもなんでもありません。ほんとうに、これまで観たホラー映画のなかでもっとも怖い。このあとに紹介する『女優霊』とベストをあらそう恐怖度です。もしこの映画をすでに観ていて「え？ そんなに怖かったかな？」と思ったかたがいらしたら、ひよつとしたら本書は読む価値がないかもしれませぬ。

じつは前作『呪怨 劇場版』は、よくもわるくもふつうのホラー映画です。オリジナルビデオ版からの〈呪怨〉のファンとしては不満が残りました。

でも、前作でおさえられていたぶん、本作で清水崇しみずたかし監督はフラストレーションを解消。ハメをはずした恐怖演出を炸裂させています。

本作はビデオ版、前作の劇場版につづいて3作目の〈呪怨〉です。にもかかわらず、いつこに恐怖度が低下していない。むしろパワーアップしているのが凄すごいところです。

たとえば、「夜中の決まった時間になると壁をたたたく音がする」という怪談をモチーフにしたシークエンス。これは『新耳袋 現代百物語 第二夜』（メディアファクトリー／角川文庫）の「壁を叩く音」で紹介されているものです。だから、ホラーファンは途中で「ああ、あれか」と

気づき、安心感をおぼえます。ところが、監督は〈ネタバレ〉していることは計算ずみ。それを逆手にとった恐怖演出が展開します。

時間軸がバラバラだから単純に怖がれる

〈呪怨〉シリーズを特徴づけるものとして、エピソードを分割し時間軸をずらす構成があります。こうした構成はほかの作品でも見られますが、この独特の構成がもつとも生きるのはホラー映画ではないでしょうか。仮に、本作の物語が時系列順に進んでいたら、「この人物はどうなったの？」という疑問がわきます。脚本で時間的・空間的なつじつまを合わせなければなりません。しかし、時間軸をバラバラにすれば、登場人物の消息は二の次になり、ただただ恐怖演出のみでシークエンスを展開できます。

〈呪怨〉シリーズは、観ている者を怖がらせることだけを志向しています。登場人物の心情だとか、背景にある人生などはほとんど語られない。わるくいえば、登場人物に厚みは感じられません。もちろん、これは欠点ではなく、ホラーの純度が高いともいえます。

ただし、本作では少し変化があります。これまでのシリーズには、主人公はおらず、登場人物は恐怖演出の駒こまにすぎなかつた。でも、本作にははつきりと主人公と呼べる人物が存在します。主人公の人生を物語の主軸にすえることで、人間味が漂ただよっています。

つまり、〈呪怨〉シリーズも3つ目になり、変わりつつあったということ。もちろん、それでも恐怖度が低下していないのは、すでに述べたとおりです。

〈呪怨〉シリーズは、べつの監督によって制作が続けられていますが、清水監督の『呪怨』最新作をぜひ観たいところです。

【関連項目】

『呪怨劇場版』は〈呪怨〉入門編と割りきる

『女優霊』は劇中映画に不気味さが漂う

本作の中田秀夫監督なかたひでお & 高橋洋脚本たかはしひろしコンビは、『リング』のほうが有名でしょう。しかし、恐怖度の高さは本作に軍配ぐんばいをあげます。

物語の舞台となる撮影所には、異変が起こる前から不気味さが漂ただよっています。セットの模型を映し出す冒頭からしてもう気色悪い。

物語は、「女優が死んで亡霊となって現れる」という典型的なもの。しかし、その女優も亡霊に殺されており、ではその亡霊の正体はなんなのか……。理屈では説明のつかないところに怖さがあります。

劇中で撮影している〈映画〉も本作に重厚感をもたらしています。その〈映画〉はホラーではありませんが、不安感をあおる内容。これも効果をあげています。

【関連項目】

『リング』は日常がちょっとズレている

『リング』は日常がちよつとズレている

鈴木光司すずきこうじによる原作小説はじつはまったく怖くありません。SFサスペンスとして読めばおもしろいのですが、本作で感じる怖さは原作にはないものです。その証拠に、原作を忠実に映像化したテレビ版はまったく恐怖をおぼえません。

テレビから〈貞子さだこ〉が出てくる本作のクライマックス・シーンはあまりに有名です。ただし、「テレビから出てくる」異常さが怖いわけではありません。〈貞子〉は見た目は人間ですが、このシーンをよく見ると、少し不自然な動きをしています。ここはフィルムを逆回転させて撮影したそうです。つまり、見慣れているはずのものがちよつとズレている不気味さ。日常と隣りあわせにある不条理。これこそがジャパニーズ・ホラーが表現してきた伝統的な恐怖。それを巧たくみに映像化したことが本作の勝因です。

【関連項目】

『女優霊』は劇中映画に不気味さが漂う

『ノロイ』で怖いのは〈幽霊〉ではなく〈人間〉

ジャパニーズ・ホラーの伝統を継承

『リング』や『呪怨』とおなじ一瀬隆重いちせただかしげプロデュース作品。これらは〈演出〉が肝きもとなる映画です。つまり、観ている人はあくまでフィクションとかつくりものとしてこれらの作品を楽しんでいます。

しかし、本来ジャパニーズ・ホラーといえは、虚構と現実の狭間はざまを巧たくみに行き来するところに味わいがありました。観客は「え？ これって事実なの？」「嘘うそに決まってる」「映像は再現だけど出来事はホンモノなんだよね？」という感覚を味わっていたのです。だから、ジャパニーズ・ホラーを代表する『リング』『呪怨』は、フィクションであることが最初からあきらかなので、むしろ異端いたんなのです。

本作は、ドキュメンタリーの体裁をとり、本物っぽくしているので、その伝統を継承しています。『ホラーマニア』でなくとも、多くの人が心霊オカルト番組（『ドキュメンタリーっぽい番組』）に親しんでいるので、『リング』『呪怨』よりも、受けいれられやすいわけです。そこに目をつけた一瀬プロデューサーと白石晃士監督しらいしこうじは『慧眼けいがん』。

幽霊が出ないのが新しい

伝統を継承をするのは結構だし、それで映画がヒットすれば成功です。しかし、「ホラーマニア」からは「古臭い」「いまさら」「過去の作品の焼きなおし」などと批判を受けかねません。

公開当時、本作のテレビCMで「画面に映った幽霊（らしきもの）」の場面が使用されていた。だから、実際に観るまで「偶然に幽霊が記録された映像」を集めた映画だと思っていました。しかし、実際は意外に「心霊映像」は多くありません（もちろん、要所では効果的に使われています）。

本作で重きを置いているのは、〈人間〉そのものの怖さです。幽霊らしきものはほとんど出てこない。でも〈怖い人〉はいっぱい登場する。呪いの背景としておぞましい〈秘祭〉の存在が浮かびあがってきませんが、〈祭り〉も結局は人間がつくり出したもの。それが怖いとすれば、そんな〈祭り〉を催す人間^{もよお}の精神のほうが怖いことになります。

多くの人が受けいれやすい伝統的なジャパニーズ・ホラーの方向性（『ドキュメンタリータッチ』を継承しつつ、「ホラーマニア」も満足できるように〈人間の恐怖〉を描く。本作はそんな古くて新しい映画です。

【関連項目】

『オカルト』は安っぽいから怖い

『カルト』は〈フェイク・ドキュメンタリー〉のいいところどり

『オカルト』は安っぽいから怖い

フィクションをノンフィクションに見せかけた、いわゆる〈フェイク・ドキュメンタリー〉。おなじ白石晃士監督の『ノロイ』の続編ともいえるべき作品です。ただ、『ノロイ』と比較すると、たまたまいが安っぽく、全体的にチープな印象が漂ただよっています。

しかし、この安っぽさが異様に怖い。

『ノロイ』は、不気味な〈世界観〉と〈人間〉の怖さの2つの要素がバランスよく調和していましたが、しかし、本作では〈世界観〉がおざなりです。そうすることで、〈人間〉の怖さが引きたっています。

『ノロイ』に登場する〈祭り〉の不気味さは、人間の精神に起因しています。本作で『ノロイ』の〈祭り〉に相当するのは、テープに映った不可思議な映像です。これは、人間の〈狂気〉が他人の目に見える形で表出したもの。それが安っぽければ、そこに健全さが感じられず、狂気の度合いが高くなるのです。

ラストの〈交差点〉や〈地獄〉のシーンもビデオの映像と同様に、安っぽさが効いています。ハリウッド映画のようにつくりこんでいたら、ここまで効果はあがらなかつたでしょう。

ただ、冒頭の〈惨劇〉のシーンは、もっと見せてもよかつたのではないか。「見せすぎない」

ことで恐怖感を高めようとしたのでしょう。でも、つくりごとに見えれば見えるほど（つまりチープであるほど）怖いシーンになったはずですよ。

【関連項目】

『ノロイ』で怖いのは〈幽霊〉ではなく〈人間〉

『カルト』は〈フェイク・ドキュメンタリー〉のいつとどろり

『カルト』は〈フェイク・ドキュメンタリー〉のいごといどり

アメリカより日本のほうが格上

本作も『ノロイ』『オカルト』とおなじ〈フェイク・ドキュメンタリー〉です。

アメリカ映画にも、古くは『ブレア・ウィッチ・プロジェクト』、最近では『パラノーマル・アクティビティ』といった〈フェイク・ドキュメンタリー〉の作品があります。しかしながら、本作を観ると、『ブレア』や『パラノーマル』は、ただの戯れ言、オママゴトに思えてしまう。それほどまでに日本のホラー映画はこのジャンルにおいてアメリカの一步先を行っています。『ブレア』や『パラノーマル』は、“本物”の体裁をとっているため、画面内で展開する現象がじつにみみっちい。本物だったらそのほうがリアリティーがあるので怖いのですが、観る者はそれらの現象が偽物だと知っているのので、結局は作品のたたずまいが貧弱なものに見えてしまいます。

どうせニセモノなら派手にやっちゃおう

「どうせ嘘だつてわかっているんだから、おもしろいことをやっちゃおう」と開きなおったのが本作の白石晃士監督です。『ノロイ』『オカルト』はその発想でつくられていましたが、まだま

だ「本物らしさ」に未練がありました。あくまで「おもしろいことをやっちゃおう」の「やっちゃおう」のほうに重きが置かれていました。つまり、『ブレア〜』などよりは虚構性を高めている（リアリティーにはこだわっていない）ものの、内容までは煮詰^にめきれれていません。

それに対し本作は、「おもしろいことをやっちゃおう」の「おもしろいこと」に力が注がれています。つまり、虚構ならではの〈遊び心〉を盛りこんでいるのです。

除^{じょ}霊^{れい}に訪^{おと}れた霊能力者が悪^{あく}霊^{りよう}に次々と倒される。そのあとピンチを救うヒーローが登場する。なんともベタベタな展開。そのヒーロー像も（あえてわるくいえば）どっかのマンガからパクってきたようなシロモノです。

しかし、あびる優^{ゆう}や岩佐真悠子^{いわさまゆこ}といったタレントを“本人”の役で登場させ、放送用カメラでPOV (point of view) Ⅱ主観視点) の映像を見せることで、かろうじて「本物らしさ」を演出しています。建前^{たてまえ}だけでも“ドキュメンタリー”にすると、ありふれた物語・設定も、じつに新鮮に映ります。

ヒーローの無敵ぶりに素直に爽^{そう}快^{かい}感をおぼえ、その活躍に拍^{はく}手^{しゅ}喝^{かつ}采^{さい}を送りたくなる。これが本作の最大のポイントです。

映像が稚拙^{ちせつ}なのが怖い

じつは本作の直前に、ジョン・カーペンター版『遊星からの物体X』を観ました。それとくらべると、やはり映像が見劣りみおとします（似たような造形のモンスターというか霊みたいのが登場する）。

ところが、本作は映像が稚拙ちせつであるからこそ恐怖感が高いのです。そう。『オカルト』とおなじ理屈です。

『物体X』の〈それ (The Thing)〉があくまで（物語のなかでは）実在するのに対し、本作の〈それ〉は“この世のモノ”ではないので、実在感がないほうがかえってリアリティーがあります。そして、造形が突拍子とつぴようしもなければ、それだけ“人知のおよばぬ存在”であることを示せます。

やっぱり幽霊より人間が怖い

ホラー映画でもっとも怖いのは、ジェイソンのような殺人鬼や『物体X』の〈それ〉のようなモンスターではなく〈幽霊〉である——これがジャパニーズ・ホラーのセオリーです。しかし、その幽霊よりもっと怖いのが生きた人間である——という真実を白石監督は『ノロイ』や『オカルト』などで表現してきました。

本作も恐怖の対象は、（タイトルから想像できるように）カルト宗教にのめりこむ〈人間〉で

す。まさに監督の得意分野であり、本作ではその真価がいかんなく発揮されているから、むしろおもしろくないわけがありません。

やや〈ネタバレ〉になりますが、本作ではすべての謎・事件が解決するわけではありません。尻切れトンボでも成立するタイプの作品ではあるものの、「ドキュメンタリーの体裁でベタな物語を展開する」というコンセプトをおしすすめるなら、次は「さらなる強敵との死闘」も観たいところです。

また、映像が稚拙であるのはいいとして、さすがにもっとべつの見せかたがあったのではないか。そんなシーンもわずかながら見受けられました。このあたりを改善できれば、なお完成度が高まったでしょう。

いずれにしても、本書としては続編が観たい映画のナンバーワンです。

【関連項目】

『パラノーマル・アクティビティ』は〈フェイク・ドキュメンタリー〉の初心者に

『CURE』は暴力・殺人を犯してもよいと思っ ている人がいる怖さ

現実世界でも不条理な暴力が発生している

駅構内で乗客が駅員や乗務員に対して暴力を振るう事例が年々増加しており、その加害者のほとんどが飲酒をしている――。

現実世界で、そんなニュースを見聞きします。

「加害者のほとんどが飲酒している」ことと「飲酒している人のほとんどが暴力の加害者である」はイコールではありませんが、飲酒による暴力が多いことに驚かされます。

お酒を飲んで“よい気分”になるのはわかります。でも、他人を傷つけようという思いがわきあがったり、暴力衝動しょうどうが惹起じやつきされたりするのはいまいち実感できません。

飲酒によって、多かれ少なかれ精神的な抑制よくせいが効かなくなるのは事実かもしれない。でも、「他人に暴力を振るうこと」を厭いとわない心理が加害者自身の自覚しないところで働いている。その事実にくすら寒いものを感じます。

無意識に人を殺してもよいと思っている

そこで思い出されるのが本作です。

首を十文字に切り裂く連続殺人事件が発生。容疑者はすぐに逮捕される。けれど、動機は不明。どうやらだれかから催眠を受けているらしい。おなじような事件が連続して起こっていく。やがて、催眠をかけた張本人は捕まる。しかし、謎は解けない――。

本作は、ひとことでいえば、「催眠で人を操り殺人を起こさせる」物語です。

ただ、劇中でも説明されているとおり、いくら催眠でも「その人の倫理観に反すること」「その人の意に反する行為」をさせることはできません。

ということは、映画の登場人物たちには、殺人に対してなんら精神的ブレーキが働いていない（人を殺してもよいと思っている）ことになります。

現実世界で飲酒によって暴力を振るう人。本作で催眠によって殺人を犯す人。両者を結びつけたくなってしまうところが、本作の恐ろしさです。

『回路』は幽霊の “侵略” を描いている

本作の幽霊は一味ちがう

まわりの人々が次々と “黒いしみ” となって消えていく。ひとり、またひとりといなくなり、やがて社会全体が崩壊してしまう――。

人は死ぬと幽霊となり〈あの世〉に行きますが、本作では〈あの世〉が定員オーバーとなり、〈この世〉にあふれ出してきます。あふれた幽霊たちのおり道がインターネット（回路）というわけです。

本作の黒沢清くろさわきよし監督は「幽霊とはなにか」という禅問答ぜんもんどうみたいなの問題はずっと追究してきました。本作の〈幽霊〉は私たちのよく知るシロモノではありません。画面の端にチラリと映るとか、振りむくとすでにいなくなっているとか、そんな生易なまやさしいものではない。「どうせ幻まぼろしだろ！」と意を決して相手に向かっていくと、実体のある肉体に触れることになってしまいます。

幽霊が侵略してくるとはどういうことか？

本作は、ジャパニーズ・ホラーの最後を飾る映画かざとして派手にドーンとやりたい、という発想から企画されたそうです。そのときほかの作品がやっていなかったのが〈幽霊の侵略〉でした。

幽霊が侵略してくるとはどういうことか？

人に取り憑いて殺す？ 死ねばその人も幽霊となり、仲間がひとり増えるだけです。〈あの世〉は定員オーバーなのだから、それでは困ります。だから、存在を消してしまおう。その結果が“黒いしみ”です。

そのことに気づいた人々が次々と自殺を遂げていきます。存在を消されるより前に、死んで〈あの世〉に行ったほうがましだから。

ほかのどんなホラー映画でも感じることでできない〈幽霊〉の实在感と、登場人物たちの中に広がる悲壮感。いや、「死ぬほうがまし」と思っているので、むしろ幸福感。

そんな不気味な感覚を味わえる作品です。

『感染』は現実世界と地続きである感覚が怖い

——これは洒落しゃれにならない。

本作を観終わった直後の感想は「なんとも嫌なものを観てしまった」でした。ホラー映画に對して正しい感覚ですが、この後味のわるさはかなりのインパクトです。

登場人物たちが次々とおかしくなっていく（謎のウイルスのようなものに「感染」していく）。ホラーとして魅力的な設定です。だから、一見、これが本作の核心のように思えます。でも、じつはちがうのです。

本作の肝きまは、医療事故とその隠蔽いんぺい工作。とくに救命措置きゅうめいそちをおこなう山場のシーンは、専門家の監修を受け、「実際に起こり得るものになっている」そうです。

しかし、映画はどこまでいってもフィクションです。たとえ事実をもとにつくられていても、映像作品になった時点で虚構となります。まして本作はホラー映画。作り手の想像力によって生み出された荒唐無稽こうとうむけいで嘘うそっぱちの世界です。

私たちは、多かれ少なかれ、現実世界と断絶だんぜつしたい（現実を忘りたい）という思いから映画を鑑賞しています。ところが、本作を観ると、断絶どころか、現実世界と映画の世界が地続きである感覚がずっと消えません。医療事故と隠蔽、医師不足、老人介護……。ふだんテレビや

新聞のニュースから受ける「嫌な感じ」が本作を観ている間、ずっとなつきまとうのです。皮肉なことに、「感染」というホラーの設定のおかげで、この「現実感」が少しだけ和らぎます。だから、娯楽作品としてなんとか鑑賞に耐えられるのです。

【関連項目】

『CURE』は暴力・殺人を犯してもよいと思っている人がいる怖さ

『予言』は「幽霊怖い」でないのが画期的

第一印象は「物足りない」

鶴田つるたのりお法男監督といえは、「幽霊怖い」をテーマにした作品で知られる一方、「少し不思議で心温まる」ものも数多く手がけています。本作は、それら相反する2つの要素をひとつの作品に入れこんだ意欲作です。ただ、鑑賞した直後にあったのは、「ホラー映画としては中途半端だ」という物足りなさでした。しかしながら、たんなる駄作と切りすてられないのもまた事実です。なるほど、恐怖演出はジャパニーズ・ホラーの第一人者だけあって、おさえるべきところはおさえています。主演の2人を始めとする役者たちもうまいし、音楽もよい仕事をしている。ようするに、欠点らしい欠点は見つからないのです。では、鑑賞直後に感じた物足りなさは、いったいなんでしょう？

「新聞怖い」という新しい恐怖

それはおそらく、本作が「幽霊怖い」ではなく「新聞怖い」をテーマにしているからでしょう。「幽霊以上に怖いものはない」というジャパニーズ・ホラーの原理原則セオリーをここでも確認できます。鶴田監督の過去の作品で本作より「怖い」ものはゴマンとあります。「怖い・怖くない」の単

純な基準だけでいえば、本作は過去作より劣ることになってしまいました。

鶴田監督ならば、「幽霊怖い」でいくらかでも「怖い」作品はつくれたでしょう。そこをあえて新境地に挑戦した制作姿勢を評価します。

そして、「新聞怖い」という新しい恐怖の創出に失敗しているかといえば、じつはそうではありません。怖さの種類は従来のものとは少し異なるけれども、やっぱり「怖い」のです。

さらに、鶴田監督のもう一方の作風である「少し不思議で心温まる」映画だと思って観れば、〈家族愛〉の物語として一本芯しんがおっています。

「ホラー映画とはなにか」。本作は、それをあらためて考えさせられます。

『輪廻』は恐怖を積みあげていく

クライマックスで劇場内が騒然そうぜん

途中まで観て「こりやダメかな」という思いが頭をよぎりました。「つまらん」「駄作」「失敗作」と思ったわけではありません。おなじ清水しみずたかし監督の『呪怨劇場版』やハリウッド・リメイク版のように「ホラー初心者向け」「多くの人が楽しめるよう恐怖度を下げたエンターテインメント作品」、すなわち、本書のような「プロのホラーマニア」には不満の残る作品です。

しかし、クライマックスで、その思いは見事に打ちくだかれます。怖かった。「プロ」でさえビビったのだから、「ブツ」の観客の恐怖は相当なものだったはず（なぜか観客の年齢層が低めだった劇場内は一時騒然となりました）。

このクライマックスは、まさに清水監督の真骨頂しんこつちようといつていいでしょう。恐怖半分、嬉しさうれ半分で、心のなかでニヤリとしてしまいました。

恐怖を積みあげている

ただし、途中までは（少なくとも本書にとっては）怖くないのはたしかです。となると、作品の完成度が低い、と評価しなければなりません、順当に考えれば。

しかし、「途中まで怖くない」理由を分析すると、「積みあげているから」だとわかります（しつこいようですが、「ブツ」の人には途中も十分に怖いはずです）。

よく考えてみると、〈呪怨〉シリーズの恐怖は、その場しのぎ、刹那的せつななものです。恐怖シーンの間にはなんの関連性もなく、単発的に恐怖演出が炸裂さくれつしていく。それが〈呪怨〉シリーズの特徴です。「時系列順にストーリーが進行しない」のは恐怖演出を効果的に見せるためなのです。

しかし、本作は、クライマックスにいたるまで、ストーリー・設定を丹念たんねんに積みあげていきます。「ブツ」の人を驚かすような恐怖演出をはさみつつ、「プロのホラーマニア」向けのミスリーディングも織おりこんでいる。だから、「ブツ」の人、「プロ」の人を問わず、クライマックスの恐怖演出を満喫まんきつできます。

それにしても、一番おっかなかったのが、やはり「伽椰子かやこ」のシーンだったのが、清水作品ウオッチャーとしては嬉しいところでした。

*劇中にほんとうに伽椰子（〈呪怨〉シリーズのオバケ）が出てくるわけではありません。意味は出演者を見ればわかります。

*この続きは製品版でお楽しみください。

シーケンエンス2●見かたを変えればもつとおも
しろい

ここに着目すればもっとおもしろくなる。他人ひとにすすめる場合にひとことそえておきたい――。そんな鑑賞ポイントを集めてみました。ここでも各作品をおもしろい順に並べています。作品選
びの参考にしてください。

『クローバーフィールド／HAKAISHA』は展開をあえて先読みする

この映画の公開当時、内容に関する情報が極端に遮断しゃだんされていました。いわゆる「ネタバレ厳禁」をうたった作品です。とはいえ、自由の女神の首がすっ飛んでくる予告編を見れば、およその内容は想像できます。だから、「ネタバレ厳禁」にあまり着目しないほうがいいでしょう。事前にくわしい内容を知らないでおくのは、映画鑑賞のイロハです。

ただ、本作の場合、ネタがあるていど割れても十分に楽しめます。簡単に先が読めてしまう物語展開もマイナスではありません。「来るぞ、来るぞ」と思っているときに「ドーン！」ってなるほうが衝撃しょうげきが大きいのです。

ストーリーを盛りあげるためにとってつけたような設定がこれまた秀逸しゅういつ。どうせなら、もつと「とってつけた」ほうがよかったのでしょうか。でも物語の主軸が「I LOVE YOU」系（ラブストーリー）なので、いいバランスなのかもしれません。

【関連項目】

『THE 4TH KIND フォース・カインド』はふつうの人を演じるジョヴァオヴィツチに注

目する

*この続きは製品版でお楽しみください。

シークエンス33●このホラー映画を1分で語る

御託ごたくを並べるのはもうおしまい。ここからは各作品の見どころをサクッと語っていきます。やはりおすすりめ順に掲載していますので、ご参考に。

『エコエコアザラク』WIZARD OF DARKNESS

『』は女性監督らしい大胆さと繊細さが魅力

女性の監督を特別視するのはまちがっているかもしれない。監督の個性がものを言うはずだから。でも、「やっぱり女性の作品だよなあ」と思わずにはいられません。墮天使ルシファーを召喚しょうかんするため、同級生たちが生贄いけにえとして無残むざんにも殺されていく。頸動脈けいどうみやくを切断して血が噴水のように吹き出すなど、残酷ざんぎやくなシーンも少なくありません。しかし、けっして嫌な気分にならずに観ていられます。大胆だいたんかつ乾かわいた残酷性が魅力。また、百合（レズ）シーンも妙にエロチック。女性ならではの繊細さも兼ねそなえています。菅野美穂かんのみほがホラー・クイーンにめざめる瞬間も目撃できる貴重な作品です。

【関連項目】

『富江』は十分に冷やされた菅野美穂の演技が秀逸

『催眠』はホラー女優・菅野美穂の二重性を味わう

*この続きは製品版でお楽しみください。

シークエンス4●映画のレビューを書く工夫

なぜ映画レビューを書くのか？ それは楽しいから。映画をより深く味わえるから。ただ、そのためにはちょっとしたコツがあります。それをみなさんに伝授します。

レビューを書く前の心構え

〈映画がおもしろいか、おもしろくないか、その根拠は作品ではなく、自分のなかにある〉
まずはこの点を頭に入れておきましょう。

たとえば、甘いものの苦手な人が流行はやりのスイーツを食べて「こりやマズイ」と言ったり、辛いものを嫌いな人が巷ちまたで評判のお店で辛さ100倍カレーしよくを食して「この店はダメだ」と文句を言ったりしたら、「だったら最初から食わなきゃいいだろ」と非難されるでしょう。

映画は、食べものとおなじ〈嗜好品しこう〉です。食べたい人が食べたいものを食べる。観たい人が観たいものを観る。これが原則です。

だから、もし映画が「おもしろくない」と感じたら、その原因は作品ではなく、自分のほうにある。たとえば作品選びの段階に落ち度がなかったかなどを確認する必要があります。

*この続きは製品版でお楽しみください。

エンディング

——ホラー映画なんて観ない。

本書に興味をもってくださったかたには、まさかそんな人はいないと思いますが、〈ホラー映画〉が嫌いな人はたしかに存在しています。また、現実世界で猟奇りょうき的な事件が起こると、〈ホラー映画〉に対する世間からの風当たりが強くなったりもします。

〈ホラー映画〉を楽しむには、いや楽しめる人になるには、いくつかのポイントがあります。それを本書では述べています。

ホラー映画好きな人も、これからホラー映画好きになりたい人も、本書を参考に〈映画人生〉を満喫していただければ幸いです。

また本書のオフィシャル・サイトでは、ささやかながら、読者のみなさんに楽しんでいただけるコンテンツをご用意しています。こちらもぜひ一度お立ちよりください。

本書は、ブログ「ぎゃふん工房の作品レビュー」「ぎゃふん工房のブログ」と、個人雑誌『ぎゃふん』の記事から、〈ホラー映画〉について語ったレビューを選んで収録したものです。

電子書籍化にあたり大幅に加筆・修正をおこないました。

ブログでは、ホラー以外の映画、書籍、音楽などのレビューも掲載しています。こちらもご覧くださいただければと思います。

『このホラー映画はなぜおもしろいのか?』オフィシャル・サイト

<http://horror-movie.gyahunkoubou.com>

ぎゃふん工房の作品レビュー

<http://gyahunkoubou.com>

ぎゅしゃふん工房の既刊本

『天使の街くハルカく』

(著・夜見野レイ／キャラクターデザイン・イラスト…ミナセ)

ガールズ・ラブ&心霊学園ホラー小説。女子高生・ハルカの想いをよせるセンパイが、〈テンシ〉と呼ばれる異形へと変わってしまう。250円

『天使の街くマヨく』

(著・夜見野レイ／キャラクターデザイン・イラスト…ミナセ)

ガールズ・ラブ&心霊学園ホラー小説。女子大生・マヨの運命が〈テンシ〉と呼ばれるバケモノに歪められていく。400円

『天使の街』オフィシャル・サイト

<http://tensi-no-match.info>

このホラー映画はなぜおもしろいのか？

2014年8月31日 サンプル版 1・0版 発行

編者 ぎゃふん工房

出版者 米田政行

発行所 ぎゃふん工房

gyahunkoubou.com

mail@gyahunkoubou.com

©2014 GYAHUN Koubou